

## ◆巻頭言◆

### アウトカム経済の時代 その7

#### アウトカム経済と利他主義

日本ナレッジ・マネジメント学会専務理事 山崎 秀夫

アウトカム経済時代の最後の特徴は「利他の要素」である。進化心理学を背景に持つ行動経済学は「限定合理性」と呼び、場の研究所はそれを共存在と言った表現でそれを示している。進化系の人類学では「互惠的利他主義」とか「利他主義」と呼んでおり、人間性の中に遺伝的に備わっているとされる。またナレッジ・マネジメントはそもそもその底に「利他主義」の要素を持つと欧米企業の中では理解されている。西海岸のカウンターカルチャー運動が提起し、インターネットで定着したオープンシステムも利他主義である。

進化心理学や脳科学の知見を見れば明らかだが、利他主義は人類の本質に備わっている。人類の基本は徹底した他者の模倣学習、ネオテニーとよばれる成人しても衰えない好奇心などに支えられてきた。二足歩行の後、獲得した大きな頭脳と手の自由は、道具の発明とエネルギーとしての火の利用を可能にしたと言われている。そして虎や豹などの獰猛なネコ科の動物などに勝ち、他の集団に勝つために人類は社会性や集団生活を獲得したと言われている。150人程度のバンドの群れの中での暮らしが一段落した後、人類は更に仲間の数を増やし、ネットワークを拡大する為に言語を発明した。性淘汰仮説によれば、「ジャガイモの代りに花を贈ると言った行為」が人類に創造性をもたらしている。おばあさん仮説は人類社会に前の世代の知識を蓄積し、ナレッジシェアリングを可能としたとしている。

これらは全て現代のアウトカム経済社会、IoT革命に通じる。インターネットにより人類はますます仲間の数を増やし、利他主義の要素を活用している。災害時や難民問題などでの利他的な反応はそれを示している。